

---

red caution

m-ktrg

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

r e d   c a u t i o n

### 【Nコード】

N 0 5 1 3 Z

### 【作者名】

m - k t r g

### 【あらすじ】

夕焼けを背に、かつて付き合っていた女性が現れた。婚約中の身だが、どうやら彼女との過去を清算しないといけないようだ。赤信号で立ち止まるのが、危険を回避するための確かな方法だが、他に

空が、赤い。

西からの光のグラデーションと、雲の影。赤と黒の絵の具を適当に絡ませたような空が、どこまでも広がっていた。

その下に立たされて、おぞましさを物寂しさを覚えつつも、それが綺麗だと感じる部分もあった。

少しずつのいろんな感情が混ざり合って　行き着いた先は、静かな不安だった。

だからかもしれない。

少し先の交差点の、横断歩道の信号が青から赤に変わった。それを見ると、俺は衝動的に走り出していた。

足の速さには、どちらかというと自信が無い。車道の信号が赤に変わるまでに渡り切るのは距離的に無理だと、わかっていた。

歩道まで走って渡ろうとしたその瞬間　信号が目の前で、青から黄色、そして赤へと変わった。やはり、かるうじて間に合わない。信号が、赤い光を発している。これからこの道は危なくなるから止まるようにと、警告の光を発している。

それでも俺はその警告を無視し、足を止めることなく、そのまま突っ切った。

横断歩道は短い距離だったと思う。実際どのくらいの時間がかかったのかわからないが、一瞬で渡り切れたように感じた。その直後、車が動き出したのが、背中越しに伝わった。

警告に従い、その場で立ち止まる　それが最適な、危険を回避する方法だろう。

だが、危険と知りながらも勢いで突っ切ってしまう　それもまた、危険を回避するひとつの方法だと思う。

別に、こんなくだらない事にスリルを求めたわけではない。

それでも、衝動的な行動の後だと、脱力気味に気分が落ち着いた。僅かな不安が晴れた先に　ひとりの女性の影が浮かんだ。

「……」

早く帰ろう、その人の元に。

横断歩道の先には、公園の並木道が続いていた。ここを抜けると、駅はもうすぐだ。

赤く色づいた木々の間を歩いていると、ふと、脇のベンチにひとりの女性が座っているのが見えた。

秋風が、冷たかった。静かに吹いたそれは、並木道の赤い絨毯を、カラカラと鳴らした。

俯いていた女性は、俺の視線に気づいたのか、顔を上げてこっちを見た。そしてベンチから立ち上がり、ふらふらと俺のほうに歩いてきた。

その顔を見て、俺は思わず立ち止まった。

「お久しぶりです……」

女性は、薄っすらと笑みを浮かべた。

彼女は決して、さっき俺の中に浮かんでいた女性ではなかった。忘れようとしていたのに、今の今まで頭のどこにも無かったのに。彼女の顔と照合する記憶が、芋づる状に掘り起こされていく。

彼女と過ごした日々。彼女と行った所。彼女と交わした言葉。彼女との行為。そして、彼女に抱いた感情。

それらが一瞬で広がり、頭の中を覆いつくした。

赤い光に照らされながら　かつて付き合っていた女性が、目の前に現れた。

「ああ、久しぶりだな……。いきなりで、びっくりしたよ」

俺の日常にとって、この出来事は大きな不意打ちだった。

とにかく、今にでも逃げ出したい気持ちだった。

いつそ、逃げ出したほうがラクだったかもしれない。それなのに、俺は動揺を隠し、彼女と向き合うことを選んでいた。必死に冷静を装っているつもりだが、顔が引きつっていそうだ。

「それで……わざわざ、どうしたんだ？」

偶然の再会とは到底思えない。彼女は明らかに、俺の帰路を待ち構えていた。

とにかく用件を済ませて、一刻も早く解放されたかった。

「私はただ……お祝いの言葉を述べたくて……」

身の周りで祝われることなんて、ひとつしか思い浮かばなかった。嫌な予感がした。

「貴方が婚約なされたと聞きましたから」

「……」

そういう噂を聞いたとか、真偽を訊ねたいとかなら、まだ嘘をついて否定しただろう。

だが、彼女の瞳は、おっとりとした雰囲気を出しつつも、じっと俺を見据えた。何かを悟っているかのようだった。

「場所を変えよう」

この並木道は人通りがいくらもあるほうで、人目につきやすい。

公園内の、池の周りにあるベンチへと場所を移した。

ふたり並んで座ると、懐かしさと共に、吐き気も込み上げてきた。ただ居心地が悪くて、苦しかった。

「君は……現在はひとり身なのか？」

「はい」

池の水面や、その上に浮かぶ落ち葉がゆらゆらと動く様を眺めな

がら、現状を確かめた。

「そうか……」

彼女の表情を伺おうとはしなかった。

「君に男女関係を迫ったのも、その別れを切り出したのも、どっちも俺だったな。俺の身勝手に君を振り回したという自覚はあるよ」

今日が何年ぶりの再会かを数えることも、しなかった。

俺は自分自身に言い聞かせるように、確かめるように、淡々と呟いた。まるで、懺悔のようだった。

「……すまなかった」

他にも言いたいことは沢山あった。だが、込み上げてくるモノが上手くまとまらなく、自然とその一言をかみ締めていた。

「俺には、君を幸せにすることが出来なかった。するつもりだったのに、出来なかった。いや……しなかったんだ。本当に、すまなかった」

「どうして謝るんですか？ ……貴方の幸せが、私には嬉しいんですよ？」

それが決して嘘をついている声でないことは、俺自身がよくわかる。

嘘であって欲しかった。ただのつまらない綺麗事であって欲しかった。

「だって……貴方のことが、今でも好きですから……」

俺の顔を覗き込んで、彼女は微笑んだ。

過去と変わらない、力無い、弱々しい笑みだった。それが彼女なりの、精一杯の笑顔だった。

かつては儚げで、それこそが美しかったのに 現在は本当に弱々しく見えた。

「やめてくれ！」

俺は思わず、怒鳴り声をあげていた。

「好きな男が幸せになったら、君も幸せになるっていうのか!？」

「……はい」

「違う！ そんなの可笑しいだろ！？」

彼女の肩に手を置き、力強く訴えた。

たとえどれだけの想いを寄せても、もう二度と報われることはない。

どれだけ虚しくても、それで本人が満足なら、それもひとつの『幸せ』なのかもしれない。

その考えは、確かに理解出来た。

「君自身が幸せにならなきゃダメなんだ！」

精一杯、反吐が出るくらいの綺麗事を吐いた。

本心は　ただ、迷惑なだけだった。

遠くからの一方的な想いを遮って生きれるほど、俺は強くない。こうして視界の隅に入った以上、これからも目障りになるだろう。ならば、元から絶つしかない。

「……俺のことは、もう忘れてくれ」

他にいい相手がきつと見つかる、とは言えなかった。

根拠の無いことを口走れなかった。仮想の他人に押し付けられなかった。それくらい、追い詰められていた。

「そんなの無理ですよ……」

唸るような……しかし、小さな声には、どうしようもない切なさ  
が滲んでいた。

久しぶりに、彼女の感情らしい感情を見たような気がした。それが一瞬、少し嬉しくて　その直後、罪悪感に拍車をかけた。

責任は俺ひとりにあると、十分にわかっている。

「なあ、頼む……。どうしたら、忘れてくれるんだ？ ……金か？」

結局のところ、それなのかもしれない。

それで解決出来るなら、償う気持ちとしても、責任の取り方としても、どれほどラクだろう。大きな額でも、仕方なく出せると思う。  
「そんなのは欲しくありません」

だが、彼女は首を大きく横に振った。決して金銭なんかで計らないでください、と否定された。

ならば一体、どうしろというんだろう。

失礼な提案なんだろうが、俺に都合のいいだけの提案なんだろうが、俺にはそれが最も合理的な解決策だと思えた。

「一晚だけ……」

途方に暮れていると、彼女はぽつりと漏らした。

「一晚だけ一緒に過ごしてくれたなら……貴方のことはもう忘れま  
す……」

我俣を言える立場なのに　まるで、親に恐る恐る強請る子供の  
ようだった。

俺の表情を伺いながら、しかしはつきりと彼女は言った。

「それを貴方との最後の夜にします……」

俺にとって都合のいい案が却下されたなら、彼女にとって都合の  
いい案が出てくるのは必然だった。

そして、それを俺が飲まなければいけないのも、必然の流れなの  
かもしれない。

それは限りなく正解に近い解答なんだろう。

「ちよつと待て……」

だが、そう簡単には飲めない。

俺には、婚約者がいる。それを飲むと、たとえ一晚だけでも、浮  
気になってしまう。結婚を控えたこの大事な時期にそれは、もし知  
られたなら、とても不味い。

いや　たつた一晚

冷静に考えると、あくまで限られた、とても短い時間だった。

昔の関係に戻るにしても、一時的なもので、今度こそ彼女は俺の  
ことを忘れてくれる。

限定的な時間と関係であることを考えると、さほど難しくないの  
かもしれない。

「……」

それに、彼女の人間性や内側はどうであれ……身体や外側は、現  
在でもまんざらではなかった。



浮気のリスクは確かにあるが、ほんの僅かな時間と、それで全てが終わることを考えると、まず知られることはないだろう。

そう、たった一晚だ。

たったそれだけで彼女との過去を綺麗に清算出来るうえ、浮気のスリルを楽しめるなら、俺にとっても都合がいい。

「……本当に、一晚だけでいいんだな？」

「はい」

「本当に、それで俺を忘れてくれるんだな？」

「はい」

「俺や、俺の身内の前に二度と現れないと約束出来るか？」

「はい。約束します」

空が、赤い。

横断歩道の向こう側は見えている。

赤い光に従って立ち止まっただけで、埒が明かない。

大丈夫、ほんの僅かな距離だ。勢いで突っ切ってしまったばい

「……本当に、これで最後だからな」

俺はベンチから立ち上がり、彼女に手を差し出した。

彼女は驚いた表情を見せた後、満面の笑みと共に泣きじゃくった。そして、俺の腕にしがみついた。

俺はそんな彼女を、正面からそっと抱きしめた。

俺の胸の中で、彼女は弱々しく震えていた。

\*

ふと、目が覚めた。

いつも使っている自分のベッドの寝心地ではないと、すぐに違和

感を感じた。

そして、自分の大切な女性ではない、別の香水の香りに、懐かしさを感じた。

落ち着く感じのいい香りだが……ぼんやりとした頭は、明白にそれを嫌いだと判断した。

すぐ隣には、確かな人気。そして、小さな寝息。

誰かが同じベッドで寝ていた。

俺はそれに目をくれることなく、薄暗い光の射し込んだ天井を眺めていた。

見慣れない天井だった。しかし、初めて見たわけではなかった。

ここは、彼女の部屋だ。

それを確かめるとすぐに、昨日の出来事が頭の中に蘇った。

とんでもないことをしたと思う。

だが、まだ目覚めきつていない頭では、いまひとつ現実味が無く

……どこか客観的に物事を捉えていた。

そう。まるで、悪い夢でも見ていたようだ。

しかし、現在こうした結果がある以上、決して夢では無い。

虚ろな感覚と確かな現実に挟まれるが、ぼんやりとした頭はどちらにも辿り着けなかった。

「……」

もう終わったんだ。

考えるのはよそう。振り返るのはよそう。

きつと、今の内に投げ出しておかないと、後々引きずることになるだろう。

約束の一夜は明けたんだ。赤信号の横断歩道を、俺は無事に渡り切ったんだ。

こうして、過去を清算した。現在は無かったことにした。そして、彼女との『これから』は無い。

俺はそう割り切ると、ベッドから起き上がり、床に散らばっていた服を素早く着た。身だしなみを気にする余裕は無かった。最低限、

外を出歩ける格好ならそれでいい。

一度もベッドに目をくれることなく、扉へと向かった。  
鍵を外し、扉を開けた。

空が、赤い。

突きつけられた光景に、呆然と立ち尽くした。  
どうということなのか、理解出来なかった。

昨日、公園で彼女の背後に広がっていたものと、まったく同じ風景だった。

まるで、この部屋で過ごした時間が切り取られたかのようなだった。  
いや……時間は本当に経過したのか？ 『最後の夜』は本当に在ったのか？

頭ははつきりと目覚めた。だが、現実はより一層曖昧になった。  
ひどく混乱する中で、ひとつだけ……赤い空が、ただおぞましかった。

ドン、と その恐怖は、まるですぐ背後で何かが爆発したかのような衝撃によって消し飛んだ。

目の前の、警告を示す色が、ぐらりと揺れ動いた。

「忘れられるわけ、ないじゃないですか……」

耳元で聞こえる囁き声が、かろうじて意識を繋ぎ止めた。

「貴方とずっと一緒に居ることが……私にとつての幸せなんですよ？」

腰の辺りが苦しくてたまらなかった。

手を回して探ると、誰かの手があった。

それは何かを握っているようで……本来は身体に在ってはいけなもの……無機質の異物が、俺の腰にめり込んでいた。

一刻も早く抜き出したいのに、腕は痙攣して力が入らなかった。

「安心してください。私もすぐに追いかけますから……」

ズブズブと、異物はより重く、より深くめり込んでくる。

それに押し出さるように、何かが喉を逆流してきて、俺は思わず吐き出した。

赤黒い液が、玄関の地面に広がった。その色は、目の前に広がる空と似ていた。

生きるために必要不可欠な体液が口から、無残に漏れている。俺の意思とは関係なく、垂れ流れていく。

元より、肉体の欠損で助かるわけがないのに……この失われている感覚が、その先を連想させた。

「貴方は……私だけのモノです」

「ああ……そうか……」

これは朝焼けだ

薄れゆく意識の中で、ようやく理解した。

そう。実際に見るのは初めてかもしれないが、朝焼けもきっと、このように赤いんだろう。

空が、赤い。

しかし、現在が本当に朝なのか、確信が持てなかった。

夜が明けた朝なのか、それともあの夕方の続きなのか、わからない。確かめる術も無い。

そもそも、あれは本当に夕方だったのか？ 本当に公園で彼女と会ったのか？ そんな疑問さえ浮かんでくる。

やはり、どうしてか、何もかもが曖昧だった。

ただ、何にしても      どうやら俺は、赤信号の横断歩道を渡り切れなかったようだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0513z/>

---

red caution

2011年12月1日22時50分発行